

2. 南インド出張報告書

2000年3月15日～23日

遠藤宣雄

1. 問題意識

南インドに出張するに当たっての私の関心は、1) 南インドの遺跡が如何なる方法論によって保存され活用されているか、2) 遺跡の保存に果たす地域住民の役割は何か3) 「遺跡（文化遺産）と自然環境（自然遺産）と地域住民の共存」という目で見たととき、各遺跡はどういう状態かという3点であった。

2. 結論

インド考古総局の担当者から懇切丁寧な遺跡の説明を受けた。

訪問先は倒壊した石造遺跡の修復現場ではなく、基礎地盤が丈夫で保存状態が良好な「生きた遺跡」、考古発掘された港湾遺跡の発掘現場、聖典に基づく復元材料の製作現場、であった。

次は伝統音楽や伝統舞踊の学習（従って伝承）及び伝統的な織物や染料やデザインの製作を行う機関の見学であった。さらに村落に残る伝統的な家屋、焼き物、オオムの飼育、織物、手工芸品、人形劇、郷土料理などを一堂に集めた施設の見学があった。伝統的なヒンドゥー教に基づく寺院が今でも市民の生活に生きており、従って遺跡は保存されている。しかし、全体的な把握が出来なかった。つまり、都市計画の中の遺跡、村落発展計画の中の遺跡というような「地域発展の中の文化遺産」あるいは「文化遺産保存と地域の近代化」という視点での調査は出来なかった。

南インドはヒンドゥー文化の風物豊かな地域のようなものである。パーム椰子が多い。但し生活との関係は不明。カンボジアの様にジュースを採ったり砂糖を造ったり果実を採ることは無いというが確認する事が出来ず理由は不明である。長距離を移動し数多くの遺跡を見学して楽しかった反面、自分の見方が稚拙であったのか、私の3つの関心は必ずしも満たされなかった。

3. ヴェニス憲章との関係

1964年に作成されたヴェニス憲章（記念建造物および遺跡の保全と修復のための国際憲章、Venice Charter）はこう述べている。

——歴史的記念建造物には、単一の建築作品だけでなく、特定の文明、重要な発展、あるいは歴史的に重要な事件の証跡が見いだされる都市および田園の建築的環境も含まれる。

歴史的記念建造物という考え方は、偉大な芸術作品だけでなく、より地味な過去の建造物で時の経過と共に文化的な重要性を確保したものにも適用される。—— 第一条

ここには、「歴史的記念建造物」には都市や田園の建築的環境（the urban and rural setting）

も含まれると書かれている。しかしインド考古総局の関心は専ら「単一の建築作品」や「偉大な芸術作品」の保存修復に在り、都市や田園の建築的環境全体の保存には目が向いていないのではないか。

インド考古総局のこの姿勢は1904年ロード・クルゾンによって設立された時から変わらないようだ。この姿勢で行くと、例え都市や田園の建築的環境が都市化や近代化を求める開発によって遺跡や遺跡環境が変革されたり破壊されたり移転されたりする危険があっても、単一の建築作品や偉大な芸術作品が安全ならば良いということになりはしないか。そういう危惧があるが確認の機会がなかった。

4. インド芸術文化遺産ナショナル・トラスト

1984年、インド芸術文化遺産ナショナル・トラスト (INTACH、Indian National Trust for Art and Cultural Heritage) が設立された。これは今までインド考古総局がなしえなかった都市や田園の建築的環境の保存を行うために設立された機関である。INTACHは設立当初から遺産保護区 (Heritage Zone Concept) という概念を打ち出して来た。これは単体の遺跡ではなく、「遺跡がある地域」を保存しようという考えで行われる遺跡保存と活用の概念である概念は方法論が無ければ行動に移せない。しかしINTACHには1996年まで方法論がなかった。それは1996年3月、遺跡エンジニアリングの考えを取り入れて構築されデリー市の南部チラク・デリーの地域開発に適用されて初めて遺跡保護区の考え方が活かされた。

こうして、上智大学アジア文化研究所はINTACHに対して遺跡エンジニアリングの技術移転を行ってきたが、遺跡保存と地域発展の両面から南インドにおいても、インド側の関心があれば遺跡エンジニアリングの技術移転は意味があるように思われる。

5. 遺跡について

- 1) 3月16日、マハバリプラム。遺跡の石にカンボジアのように小さな穴が全く空いていなかった。これは何故か。何故カンボジアの石には空いているのか。カンボジアの場合、石を運ぶとき使ったと言われるがそうだろうか。南インドとカンボジアでは運び方が違うのだろうか。それはどの様に違うのか。何故違うのかに興味を持たれた。
- 2) 3月17日、カンチプラム。ヴァラダラージャ・ペルマール寺院の塔の修復現場を見た。木で組んだ槽を登り壁面の彫刻の修復後の乾燥の場面、太陽光が強いため覆いをしてひび割れを防いでいた。作業は考古総局45人によって管理されているが、住民は200人雇用されている。石工は日給150Rs (\$1 = Rs43)、6時間労働、一般労働者は男日給Rs100、女Rs85である。住民には遺跡の意味や歴史、昔の技術などが教えられている。修復は材料も割合も文献 (聖典) にある通り昔の方法で行われているという説明があった。
- 3) 3月19日、ベルレ (BELURE) とハレビ (HALEBID) という石造寺院の彫刻を見た。リアルで精巧で数が多いことに驚いた。テーマはヒンドゥー教の神々や仏教の教えに関するものである。これがカンボジアに伝わったのかと思った。

- 4) 3月20日、終日世界遺産のHumpiを見学した。岩石が多く古代人は自然環境に合わせて都市づくりを行った様子があった。広大な地域に遺跡がコンプレックスを造っていて初めて行った自分には始めの問題意識を思い出したり、それを質問する余裕が無かった。観光客はいたが住民の姿が見えない遺跡であった。周囲の丘や石の遺跡の景観は素晴らしかったが、こういう広い範囲の遺跡保存はどのような方法で行うのか課題が多いであろうと思った。
- 5) 3月18日、バンガロール。先生と学生が遺跡を見学している場面に接した。あちこちでこういう場面に接したいと思っていたためもったとした。
- 6) 3月22日、カラクシェトラ基金。伝統舞踊、音楽、絵画、織物のトレーニングを行っていた。その後の就職口があるかないかが存亡の決め手になるという話であった。継続的な需要を如何に掘り起こすか、これが伝統的な無形文化の保存と伝承の鍵であろう。
- 7) 3月22日、ダクシナチトラ。研究者と職員が民族博的な発想で保存を行っている。現地(村)では出来ないのここに移設しているが、家、鳥のオオム使い、焼き物、織物、料理(レストラン)などもあり料金を取っていた。こういう施設は観光客が来て料金を払わないと経営が困難である。ここで何を学び、研究するか。この施設が地域資源であるかどうか鍵であろう。
- 8) カンボジアのアンコール地域で見られるように住民が遺跡の近くに住んでいて、自由に入り出す姿がない。これは南インドの事情であろう。